

## 魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

### 50 兵を挙げよ！

ニーダマは、あの時からずっと考えていたのです。王ならば、先手を打つべきではないか、と。

「もちろんだ、もちろんだとも！」

誰もいない王の間で、ニーダマは拳を合わせて言いました。その時のニーダマの心の中には、黒い勇気がふつふつと湧き上がっていたのでした。

「魔女の好きにはさせぬ。この世界で一番偉いのがこのニーダマ王だということ、魔女どもに思い知らせてくれる」

ニーダマは大急ぎでお城の石段を駆け下りてバルコニーに出ると、あらん限りの大声を上げました。

「兵を挙げよ！ 今この時、エックエックの偉大なる王国は、東の魔女王に戦いの狼煙を上げんとす！ 兵よ、大臣よ、家来たちよ、魔女どもの時代は終わったのだ。これからは、我ら人間こそが唯一の、この世界の主人である！ さあ、デッキデッキに向けて、兵を挙げるのだ！」

これを聞いて、兵士たちはびっくりして顔を見合わせます。王様の言葉に、やーと拳を上げたら良いのやら、尻尾を巻いて逃げ出したら良いのやら、どうしたら良いのかさっぱりわからないのです。

家来たちは青い顔をして、その場でじっと立ちすくんでいました。誰も、動くものはいません。

でも、兵士たちは心ひそかにこうも思ったのです。エックエックの国はずっと平和なばかりで、戦なんて行ったことがありません。ニーダマ王のような勇敢な王様を戴いて、もしかしたら今こそ自分たちは、初めて兵士としての役目を立派に果たすときなのではないか——と。

ひとりの兵士が言いました。

「ニーダマ王様、畏れながら申し上げます。東の魔王は炎の使い手、それに、デッキデッキのとんがり山にはまだほんとうに大きな大蛇がいるそうではないですか。我らが戦を起こしたとて、そんな恐ろしいやつばらに勝利をあげられるものなのでしょうか？」

ニーダマは、口を閉ざして遠くを見つめています。別の兵士が小声で隣の男に言います。

「ああ、そうだ、そうだよ。魔王は、とんでもなく恐ろしいんだ。この間の炎を覚えているか？ あんな炎で焼かれちゃあ、勝利どころかひとりだつて生きては帰れねえ……」

「ああー、恐ろしい。おれは嫌だね、戦になんか行かないぞ！」

「お前たちそれでエックエックの兵士か！ おれは行くぞ。この腕で魔王の首を、ちょーん切つてやる！」

「おお、言つたなお前！」

「言つたともよ、言つたが悪いか！」

兵士たちがざわざわと言ひ合います。興奮した兵士たちは、今にもけんかを始めてしまいそうですよ。大事な戦を前にこんなことで、大丈夫なのでしょうか……。

その様子を見かね、隅でじつとしていた大臣がそつと前へ出て言いました。

「静かにするのだ。兵士ども、ニーダマ王様の堂々としたお姿を見よ。兵士として恥ずかしくはないのか！」

〈 つづく 〉